

年次進行対応型教科書の要件構築とその開発

——“把”構文の用例を中心に

張軼欧

0. 初めに

現在の日本の大学における中国語教育には、教育者・学習者・教科書についてさまざまな問題があり、中国語教育の効果を出すには大きな障壁になっている。本研究では、大学における中国語の学習者（特に初級・中級の学者）を対象に、今使っている教科書の問題点、及び学習者の学習要求を調査し、教科書を作成する基本ベースを明確する。それから、学習者、教育者、歴史上及び現在の国内、域外の教科書など教育活動と関わる諸要素を巡って、それらを総合的、多元的、分野横断的に研究を深化、展開していくことにより、学習者が効果的、効率的、系統的に学習できるように、学習内容を言語学的なアプローチにより分類し、教室文法として再構築する。最後に、今の時代に欠かせないマルチメディアの教育手法を利用するによって、新次元の教材としていかなる効果があるかは検討する。

1. 本研究の学術的背景及び研究目的

1.1 学術的背景

平成 20 年度文部科学省によって行われていた「大学における教育内容等の改革状況について」の調査によれば、平成 18 年度は、全国の 709 校の大学のうち、84%にあたる 596 校で中国語を設置し、英語に次ぐ順位にある。また、中国の対外漢語辦公室の調査によれば、2005 年日本における中国語の学習者の人数は 200 万人以上であることが分かった。大学生がこの 200 万人の多数を占めている。日本の文科省の調査データも概ね同様である。今後のニーズに応じて中国語教育を入れる大学がますます増えるという国内動向は容易に予測できる。

近年日本における中国語教育業界においては、以下のような状況を伺える。中国語を勉強する学生の数が増加しているにも関わらず、教科書を対象とする研究はかなり遅れており、報告論文も大変少ない。

教育活動は、教える側（教師）、受ける側（学生）、知識媒体（教科書）という三つの部分からなっている。優れた教科書は教育活動を円滑に進めることができるファシリテーターの役割を担うだけでなく、学生の学習意識を引き出し、学習意欲をアップし、学習成果を最大に高めるブースターの働きもある。そして、自習のときには勉強の方向性を教えるコンダクターの役割も必要である。しかし、国内の教科書を見渡しても上記の役割を十分に果たしているとは言いが難いのが現場サイドの印象である。現場サイドでは、予算の許す範囲で執筆者個々の考えに基づき、即効性のある教科書を作成している。最近の出版業界が教師の専門書の出版を後押しするようになってきたことも、国内における中国語の教科書出版数の増大の要因と言えよう。しかし、多くの現場では 1 年生を対象とする授業を持つ教員が多いため、必然的に入門用としての一年次用のテキストが多くなり、結果として体系的になっているものが少ないのが現状である。そのため、長期的視点での新しいパラダイムの開発やチャレンジ性のある教科書の開発が必要ではないかという考えに至った。

今日本に出版されている学生用の教科書に対して、以下のような主要な問題が存在していると指摘されている。

- (1) 教科書の作成する際には、学習者のことを考慮せず、彼らの学習意識、ニーズなどを無視していることである。

- (2) 出版数が多いことに対して、全体的に、教える系統がなく、同じレベルの学習者に対して、著者によって語彙数、文法事項の数、文型などはまちまちである。
- (3) 一年生から四年生まで、4年間の学習活動に対して、系統的に勉強する教科書は極めて少なく、ほぼ空白である状態である。
- (4) 厳密さが足りず、不自然な表現や間違っている解釈が多数ある教科書がたくさん存在している。
- (5) 本文や文法ポイントの解釈に力を入れることに対して、学習者の学習度をチェックする練習問題の設置量、及び授業以外の学習活動の一環としてのサポートが少ないこと。
- (6) 学習知識の系統性、コミュニケーション能力の育成の実用性、中国文化を紹介する文化性などの要素を含めているものが少ない。

1.2 本研究の目的

“把”構文は中国語特有の構文であり、使用頻度が高いにもかかわらず構文理論が難しい。そのため教育現場では教育者と学習者の双方を常に悩ませている。一方で、教科書を代表とする第二言語教材は、学習者が言語スキルを習得するための重要な手段であり、教育資源であると同時に学習資源でもある。そのため、教材の合理性や科学性は学習者の学習成果に直接影響を与えている。

これまでの研究成果は、日本語を母語とする中級学習者を対象としており、特定の文型に関する研究はほぼ白紙の状態である。

このような背景を踏まえ、本研究では日本語を母語とする学習者を対象に議論を展開するものである。このグループの誤用分析を通じて、当該学習者の誤用のタイプや特徴を明らかにし、さらに教材が“把”構文の誤用に及ぼす影響を探るものである。そして、現在の教材における“把”構文の取り扱いに存在する問題点を指摘し、将来の教材の編纂および授業指導に対して何らかの示唆を与えることを目的とするものである。

2.“把”構文に関する考察

2.1 考察対象及び考察文型

小論の考察対象は、日本語を母語とする中級レベルの中国語学習者であり、使用するデータは、2021年11月28日に日本中国語検定協会（以下「中検協会」と略す）が実施した第104回日本中国語検定試験（以下「中検」と略す）2級試験の第5問（日訳中）の受験者の回答（合計1408件）である。この問題では「きのう、わたしはうっかりして携帯電話を電車に忘れてしまいました。」を中国語に訳すという内容が出題された。

この対象者とデータを選定した理由は、これまでの日語母語話者を対象とした“把”構文の習得および誤用に関する研究に、以下のような問題が存在するためである。

- 1) 使用されるコーパスにおける誤用判断が主観的すぎる。
- 2) 学習レベル別の考察において、対象者数が少ない。
- 3) 高級レベルと初級レベルの学習者に焦点が集中しており、中級レベルの学習者に関する考察が不足している。
- 4) この問題の中検協会公式サイトが提示した模範解答は「昨天我不小心把手机忘在电车上了。」であり、この文型は「把+N1+V+P（介詞）+N2+L（方位詞）」という形式である。“把”構文はHSK試験のシラバスにおいて3級で初めて登場する文型であり、この文型は“把”構文句の初歩段階における代表的な文型の一つである。

2.2 統計方法

日本語の「きょう、わたしはうっかりして携帯電話を電車に忘れてしまいました。」に対し、公式サイトが示す模範解答は「把」字句である。統計の過程で、試験の回答用紙には次のような例が見られた。「我不小心手机忘在電車上了。」または「我手机不小心忘在電車上了。」などの回答である。これらの文は「手机（携帯電話）」を述べ

たいテーマとして扱っており、日本語原文との対応にずれがある。そのため、本稿ではこのような文を「非合法文」に分類した。ただし、この文が翻訳ではなく作文や口頭表現で出現した場合は合法と見なされる可能性がある。そのため、調査対象の資料の種類によって判断基準が異なることも考慮される。

慎重を期すため、日本在住で日本語を自由に使用できる中国語母語話者 50 名を対象にアンケート調査を実施し、中検試験問題の該当文を翻訳させた。この 50 名全員が例外なく「把」字句を用いて翻訳を行った。このことから、受験者の誤用には他の誤用とは異なる特徴があると判断し、本稿ではこの種の文を「非合法‘把’字句特殊タイプ」と定義した。

また、調査の際には、誤字や脱字を考慮しない方針とした。例えば、「忘」を「掉」「放」「丟」「扔」「留」「忘掉」「忘記」「忘帶」と書いた場合や、介詞「在」を「到」と書いた場合などは誤りと見なさず、受験者が「把+N1+V+P (介詞) +N2+L (方位詞)」という構造を持つ文を作成していれば、合法文として統計対象とした。

日本語の「うっかりして」に対応する中国語「不小心」は、「把」の前後どちらにも置けるため、統計上は「不小心」の位置については考慮せず、「把」字句の他の構成要素に注目した。本稿で考察する完全な文型は「把+N1+V+P (介詞) +N2+L (方位詞) +了」とする。

この試験問題の模範解答は「我不小心把手机忘在电车里了。」であるが、口語では「我不小心把手机忘电车里了。」とも言える可能性がある。この文型で、位置変化を表す場合、変化後の場所の前に必ず介詞が必要かどうかについて調査した。CCL コーパスを用いて「把\$30 放在眼里 (中、内) /心里 (上、中) /家里 (中) /冰箱里 (内)」を検索したところ、1239 例が得られた。そのうち介詞「在」がない例文は 24 例のみであった。このことから、この種の「把」字句では、場所の前に介詞が必要であることが多いと考えられる。そのため、介詞がない文は誤用文として統計対象とした。

1 つの文に複数の誤用が含まれる場合、例えば「我把手机电车忘。」という文には、動詞の語順ミス、介詞の欠落、方位詞の欠落、「了」の欠落といった誤用が含まれる。このような場合、それぞれの誤用を個別に統計し、詳細な観察を行った。

2.3 誤用の統計

正しい例文と誤用例文を対比することで、誤用の特徴をより明確に把握することができる。しかし、紙幅の制約により、以下の表では構造タイプごとに典型的な誤用例文のみを列挙する。

表 1: 「把」構文誤用の統計

編號	構造タイプ	数量 (件)	例文
①	空白、無「把」、不成句	48	
②	無「把」、文が不合法	379	我放在電車我的手機。
③	無「把」、非合法「把」字句特殊類型	55	我不小心手機忘在電車上了。
④	構造が完全	502	
⑤	「了」の欠落または「的」の誤用	189	我把手機忘在電車的。
⑥	介賓短語の語順誤り a	120	把手機在電車裏忘記了。
⑦	「了」の語順誤り	96	把手机忘了在电车里。
⑧	方位詞の欠落	54	我把手機忘記在電車了。
⑨	介詞の欠落	35	把手機忘了電車上。
⑩	動詞の語順誤り a	17	忘記把我的手機放在火車上了。
⑪	介賓短語の語順誤り b	16	在電車裏把手機忘了。
⑫	動詞の語順誤り b	2	把忘了手機在電車上。
⑬	動詞の欠落	1	把手機在電車裏了。
⑭	介賓短語の欠落	1	把手機忘掉。

以下は、表 1 のデータを習得程度に基づいて分類し、それぞれの比率を示したものです。

第一類: 「把」字句の使用条件が不明確で、まったく「把」字句を使用しなかったタイプ。(該当: 編號①-③) 割合: 34.2%)

第二類: 「把」字句の使用条件が明確で、正しく「把」字句を使用できたタイプ。(該当: 編號④) 割合: 35.6%)

第三類: 「把」字句の使用条件が明確であるものの、使用中に誤用が見られたタイプ。(該当: 編號⑤-⑭) 割合: 30.2%)

さらなる詳細な観察のために、第三類の具体的誤用分類を以下のように順序付けた。

表 2 誤用分類統計

順位	誤用特徴	数量 (百分比)	表 1 に対応する番号
1	「了」の欠落、語順誤り、誤用	285 (67%)	⑤⑦
2	介賓短語の語順誤り	136 (32%)	⑥⑪
3	方位詞の欠落	54 (12.7%)	⑧
4	介詞の欠落	35 (8.2%)	⑨
5	動詞の語順誤り	19 (4.5%)	⑩⑫
6	動詞の欠落	1 (0.002%)	⑬
7	介賓短語の欠落	1 (0.002%)	⑭

2.4 考察のまとめ

前節の統計分析を以下のようにまとめる。

- 一、中級学習者の中には、「把」構文の典型的な使用条件が明確でない学習者が一定の割合で存在する。
- 二、「把」構文の使用条件を理解しているものの、使用時に発生する偏りについて表2の統計から以下の点が明らかである。第1位の誤用（「了」の欠如、語順の誤り、誤用）および第3位の誤用（方位詞の欠如）は、合計で全体の誤用比率の79.7%を占める。しかし、これらは「把」構文の文型構造そのものに関する誤用ではない。
- 三、動詞に関連する誤用はわずか4.5%に過ぎない。このことは、学習者が「把」構文の使用条件を理解した場合、前置詞「把」、目的語、述語を正しく並べることができることを示している。
- 四、本稿で論じる「把」構文の文型に関連する誤用の中で最も主要なものは、述補構造における前置詞に関する部分である。具体的には、介賓短語（前置詞と目的語の短語）の語順誤りや前置詞の欠如が含まれる。

3. 誤用原因分析

3.1 誤用の原因

周小兵（2007）によれば、本研究に関連する外国人が中国語文法を学ぶ際の誤用の主な原因は、母語の影響、目標言語規則の過剰一般化、コミュニケーション戦略の使用、教育の誤導の4つである。異なる文法項目に対応する誤用の原因は異なる場合がある。本研究で扱う「把」構文について言えば、「把」構文は中国語特有の文型であり、日本語には対応する文型が存在しないため、母語の影響による誤用は除外できる。また、学習者の誤用タイプを総合的に見ると、他の中国語文法項目の習得が「把」構文に干渉を与える（目標言語規則の過剰一般化）現象は見られなかった。

コミュニケーション戦略の使用や教育の誤導が回避現象を引き起こす可能性がある。これは、「把」構文を使用すべき場面であえて使わないことを意味する。しかし、静的なデータからは、回避の誤用がコミュニケーション戦略に起因するかどうかを判断することは難しいため、小論ではこの部分については議論を展開せず、周小兵（2007）が述べた「教育の誤導」による誤用、すなわち教育に関連する問題のみについて考察する。なお、コミュニケーション戦略による「把」構文の回避問題については、別途研究を行う予定である。

教育に関連する部分に関して言えば、具体的な文法項目の誤用が生じる原因は多岐にわたる。習得の観点から見ると、文法項目の初期理解、その後の運用、習得後の忘却習得した知識の復習や定着など、多方面の問題が含まれる。教育の観点から見ると、学習段階に応じて教材による文法項目の解説、例文の設計、応用練習問題の作成、既習知識を強化するための本文の編成などが関連している。本調査では静的データを使用したため、誤用の結果から直接的な原因を特定することは難しいが、初期段階の教材内容（解説や例文を含む）が学習者の「把」構文の習得に直接的な影響を与えることは疑いようがない。

前述の2.4節の考察から明らかなように、中級学習者の誤用は主に使用条件の不明確さや「把」構文内の介賓短語の語順誤りに集中している。この点について、以下でそれぞれ論じるとともに、これを基に現行教材の問題について検討する。

3.2 「把」構文の使用条件と語用的意味

『实用現代漢語文法』では、「把」構文の使用条件を以下のように定義している。

「ある事物について、命令、叙述、説明を行い、その事物に対してどのような動作を加えるかを述べ、その結果として何らかの変化や結果が期待される場合、また行為者や責任者を特定する場合に、『把』構文を使用すべきである。」

この定義には以下の問題がある。定義中の「期待」という語の使用が、行為を意図的なものに限定しており、不本意を表す「把」構文を包括することができていない。この定義は範囲が広すぎるため、「把」構文だけでなく、

「被」構文にも当てはまる場合がある。「被」構文もまた、行為者の行動によってある事物が結果や変化をもたらすことを叙述・説明する場合があるためである。劉頌浩(2017)は「把」構文の文法的意味を以下のように要約している。「Aの(意識的または無意識的な)行為の影響によって、Bが何らかの(明示的または暗示的な)新しい状態になること。」この説明は、『实用現代漢語文法』の定義における「不本意を表すことができない」という問題を解決しているが、依然として範囲が広すぎて「被」構文を排除できないという問題を解決できていない。

これらの問題点を補完し、小論では「把」構文の使用条件を次のように具体的に定義する。

「行為者または責任者を起点として話題を展開し、その行為者または責任者の意識的または無意識的な行動を通じて、話者が注目している特定の事物に何らかの変化が生じる、あるいは何らかの状態に置かれる場合に、『把』構文を使用する。」

「把」構文には「責任を負う」という意味が含まれている。話者の認識において、動作の主体はその出来事全体について責任を負う。この意義のために、「把」構文の文末が動詞単独で終わることはできない。責任とは具体的な事態や結果に関連しているものであり、動詞単独では具体的な事態を表現できないため、動詞の後に別の要素を加える必要がある。これにより、詳細を補足し、事態を明示することができる。

一般的な能動・目的語構文が客観的な陳述であるのに対し、「把」構文には話者の強い主観性が伴う。「責任を負う」という意義は文脈によって異なる意味を反映する。たとえば、

「小明把桌子踢壞了。」(小明は机を壊すほど蹴った)の場合、小明は机を壊した責任者であり、その行為について責任を負う必要がある。「小王把桌子修好了。」(小王は机を修理した)の場合、小王は机を修理した責任者であり、称賛されるべきである。本論文で扱う文例「我不小心把手機忘在電車上了。」(私はうっかり携帯電話を電車に忘れてしまった)では、話者自身が自責の意味を込めている。

3.3 「把」構文の典型的な文型—“必把句”

前節で「把」構文の使用条件を再定義した。この使用条件をより具体的かつ直接的に示し、学習者が「把」構文を感覚的に理解できるようにするためには、“必把句(かならず“把”構文をつかわなければならない文型、以下は“必把句”と称する)”の整理が不可欠である。教育業界ではすでに多くの研究者がこのテーマに取り組み、様々な角度から必把句を総括し、将来の研究に貴重な基盤を提供している。しかし、現在まとめられている必把句にはいくつかの不足が見られる。本稿では、紙面の都合上、既存の研究成果を詳述せず、主な不足点を簡潔に述べる。

a. 呂文華(1994)の分類について

呂文華(1994)は、語用の観点から「把」構文の使用頻度に基づいて詳細な分類を行った。しかし、劉頌浩(2017)が指摘しているように、「純粹に分類の視点から見ると、呂文華のこの分類にはいくつか議論の余地がある。」さらに、呂文華(1994)の分類は詳細ではあるものの、挙げられている分類タイプのすべてが必把句に該当するわけではない。

b. 王占華(2011)の分類について

王占華(2011)は、「把」構文が反映する出来事構造に基づき、「四項『把』構文」「三項『把』構文」「二項『把』構文」の3種類に分類し、これらを提示した順序に従って指導することを提案した。しかし、王占華(2011)の分類のうち、「四項『把』構文」以外は必把句には該当しない。また、王占華(2011)では、どのような状況や意味を表現する際に必把句を使用するのかが明示されていない。

c. 『实用現代漢語文法』の分類について

『实用現代漢語文法』では、文型構造に基づき7種類の必把句をまとめている。しかし、第二言語として中国語を学ぶ学習者にとって、単に文型構造の観点から分類することはあまり意味を持たないと考える。なぜなら、学習者にとって「把」構文を使用する際の手順は、まず「把」構文の使用を確定し、その後に構造を考えるためである。さらに、第二言語学習者にとっては、文型構造よりも意味に基づいて理解し、区別する方が受け入れやすい。このため、本稿での必把句の考察もこの順序に従い、語義的なアプローチを重視して行うこととする。

3.3.1 意味的制約を受ける必把句

A. 意味：対象（「把」の目的語）が空間的な移動を伴い、「把」構文は移動後の帰属先を表す。

文型：S+把+N1+V+在/到/回/进+N2

この意味には、移動が明確な顕性と、外見上は観察できないが認知的な移動がある隠性の2種類がある。

顕性：感覚的に位置の変化が認識できる場合（例1、例2）。例2では意図しない結果を引き起こす動詞（忘れる、落とす、失うなど）が用いられる。

隠性：視覚で直接確認できないが、動作主の認知内で移動が発生する場合（例3）。

例：

1. 回家后，张女士就把牛奶放在冰箱里。（帰宅後、張さんは牛乳を冷蔵庫に入れた。）

2. 我那把小提琴忘在家里了。（私はそのバイオリンを家に忘れてきた。）

3. 心细的儿媳妇刘芳早把公公的一切看在眼里，记在心头。（細やかな心配りを持つ嫁の劉芳は、義父の全てを目に留め、心に刻んでいた。）

B. 意味：対象が実際または認知的に状態変化を起こす。「把」構文は変化後の状態を表す。

文型：S+把+N1+V+成/作+N2

この意味も、顕性（実際の変化がある場合）と隠性（認知的変化がある場合）に分かれる。

例：

顕性

4. 把一个苹果切成三块。（リンゴを3つに切った。）

5. 他们已经把生米做成了熟饭。（彼らは米を炊いてご飯にした。）

隠性

6. 原来老人年纪大了耳朵背，把“三叉戟”听成“三只鸡”了。（年老いた祖父は耳が遠く、「三叉戟」を「三匹の鶏」と聞き間違えた。）

7. 三婆呢，也不见外，把官兵们看成亲人。（姑はよそよそしくなく、官兵たちを家族のように見なした。）

C. 意味：動作によって対象全体がある結果を生じる。この場合、範囲を表す副詞「都、全」などが使用される。

文型：S+把+N1+都/全+V+a

例：

8. 但贝塔斯曼的家族把这些股份都买了回来，就是不让上市。（ベルトルスマン家はこれらの株を全て買い戻し、上場を阻止した。）

D. 意味：対象の所有関係が動作によって変化する。動詞は通常「送给、交给、转给」などが用いられる。

文型：S+把+N1+送(交/转/寄)+给+N2

例：

9. 一个女人，把贴身挂的香袋子送给一个男人，毫无例外地是私情的表记。（ある女性が身につけていた香袋を男性に渡すことは、私的な感情の証拠である。）

E. 意味：動作により対象に何かを付加または喪失させる。

文型：S+把+N1+V+N2

例：

10. 我已经把床垫拆开修好了，还把破的地方补了补丁。（マットレスを分解して修理し、破れた箇所にはパッチ

チを当てた。)

11. 把苹果、雪梨削皮，切去两端，取出果核，……。 (リンゴとナシの皮をむき、両端を切り落とし、種を取り出して……。)

F. 意味：非生命体を対象に影響を与える場合。対象は生命体であることが多い。

文型：S+把+N1+V+a

例：

12. 看个书把脸看得通红、明天的考试，希望顺利啊。(本を読んで顔が真っ赤になった。明日の試験、うまくいくといいな。)
13. 一场“米老鼠风波”，像一记重槌，把冠生园从梦中敲醒。(ミッキーマウス事件は重いハンマーの一撃のように、冠生園を夢から覚ました。)

3.3.2 形式の制約を受ける必把句

A. 一部の離合詞は必把句を使用する必要がある。

これらの離合詞は「動詞+目的語」の構造であるため、後ろに目的語を直接つけることができず、必把句を用いる必要がある。

例：

14. 刘博士一直把他们父子的交谈录音。(劉博士は彼ら親子の会話を録音し続けた。)
15. 饭前，公证人把屋契教我签字，连付款收据都附了来。(食事前、公証人は私に家屋契約書に署名させ、支払い領収書も添付してきた。)

B. 一部の離合詞は「VV+O」の形に変化した際に必把句を使用する。

例：

17. 李大夫往康伟业手里塞了几粒酒精棉球，说：“把碗筷消消毒。”(李医師は康偉業の手にアルコール綿を数個渡し、「食器を消毒してください」と言った。)

C. 動補構造で目的語がある場合、必把句を使用する。

例：

19. 今天考历史把答案写错地方了。(今日は歴史のテストで答えを書く場所を間違えた。)

D. 「得」のついた様態補語を用いる場合、必把句を使用する。

例：

20. 花了两个小时，把房间漆得雪白，一尘不染。(2時間かけて部屋を真っ白に塗り、一点の汚れもないようにした。)

E. 前の物品を代名詞や修飾語のない名詞で参照する場合、必把句を使用する。

例：

22. 我原想把这件宝物传给儿女，现在把它送给你。(この宝物を子どもに渡すつもりだったが、今あなたにあげることにした。)

4. 現行教材における問題点と所見

本調査において、現行の教材に以下のような問題が存在することが確認された。「把」構文の使用条件が明確に示されていないこと、大量の非必把句の例文が使用されていること、さらに練習問題の設計にも問題があること

である。

日本の主要出版社が近年刊行した大学向け中国語教材をランダムに調査し、32冊を抽出した。これらは入門用教材24冊と入門以上の教材8冊であり、対象出版社には朝日出版社、金星堂、同学社、白水社、白帝社、駿河台などが含まれる。調査した教材のうち、11冊は「把」構文の文法項目に触れていなかった。残りの21冊の教材には、文法項目や課文の中で「把」構文が合計85例登場している。

すべての教材において、「把」構文の説明は通常、その文法的意味に焦点を当てたものであった。しかし、「把」構文の使用条件について明確な説明がされていない。第4節の内容からも明らかなように、文法的意味のみの説明では学習者が「把」構文を使用する必要性を理解することは困難である。使用条件が明確に示されていないことは、学習者の誤用を招く主な原因となることは明らかである。

調査対象の教材に掲載された「把」構文の例文について、表3の統計によれば、約8割が通常の“SVO”（主動賓式）で構成されており、必把句はわずか15%しか占めていなかった。このような状況では、学習者が「把」構文を使用する必要性を感じ取ることが難しい。

表3 現行教科書における“把”構文についての統計

SV0 文型と 替えかえる	必把句			
68 (80%)	17 (20%)			
	把+N+V+在 / 進 / 到 +N+L 11 (12.9%)	把 +N+V+ 成+N 1 (1.18%)	把 +N+ 都 +V+a 4 (4.7%)	其他 1 (1.18%)

本論文で考察した文型の教材における出現率はわずか12.9%である。この文型に触れる機会がなければ、「把」構文を使用する必要があることを理解していても、前置詞短語の位置に困惑し、一般的な語順で動詞の前に置いてしまう可能性が高い。この問題は調査した試験問題の結果にも反映されている。

また、文法項目の応用に関連する練習問題について、調査対象の21冊の教材では、「把」構文に関する練習問題は主に並べ替え問題や選択問題の形式が採用されている。一方で、学習者の文法知識の理解や応用力をより正確に反映できる日本語から中国語への翻訳問題は、調査対象の教材中に7問しかなく、そのうち必把句はわずか2問にとどまっている。一部の教材では翻訳問題があったものの、その練習問題には「この文には『把』構文を使用する」というヒントが付いていた。このようなヒント付きの練習問題では、学習者が「把」構文の使用条件を正確に理解しているかどうかを評価することができない。そのため、学習者が練習時に正解を出せたとしても、実際の運用において「把」のヒントがない状況で正確に表現できるかどうかは疑問が残る。

以上の調査から、現行の教材では、「把」構文の使用条件に関する説明、例文の選択、および練習問題の設計のいずれにも多くの問題が存在することが分かる。これらの問題は学習者の「把」構文の習得に直接的な影響を及ぼす。教育者や研究者はこれらの問題を重視し、具体的な状況に応じた解決策を講じる必要がある。

5. 結語

本研究では、日本語を母語とする中級レベルの中国語学習者を対象に、「把」構文の典型的な文型の一つである「把+N1+V+P（前置詞）+N2+L（方位詞）」文型に関する誤用調査を行った。この調査を通じて、学習者の誤用の特徴を明らかにし、現行教材におけるいくつかの問題点を発見した。その主要な問題は、「把」構文の使用条件が明確に示されていない点と、多くの非「必把句」の例文が使用されている点である。今後の教材編纂において、これらの問題が編集者に認識され、適切に解決されることを期待する。

しかしながら、初級段階の教材の科学性や合理性は、学習者の初期段階での理解と応用に良い基盤を提供する

ものであるが、習得後の知識の復習や定着、さらには完全な習得に至るまでの過程においては、中級・上級段階の教材や実際の指導が重要な役割を果たすことを認めざるを得ない。現在、学界における誤用に対する一般的な認識は静的なものに留まっており、本研究で行った誤用調査も静的な観察に基づくものである。このような研究では、教材の問題が学習者に与える影響を観察することに限られる。

中級・上級段階で発生する誤用の原因は、初級段階よりもはるかに複雑である。これには、初級段階での「把」構文に対する理解不足に加え、習得後の忘却の問題などが含まれる。そのため、中級・上級段階で発生する誤用の性質、すなわち初期の理解不足に起因するものか、それとも習得後の忘却に起因するものかを具体的に検討する必要がある。このためには、動的かつ通時的な追跡調査が求められる。

本研究の主な目的は、教材と誤用との関係を考察することであり、動的かつ通時的な研究は今後の新たな課題として展開していく予定である。

参考文献

- 程樂樂 2006. 日本留學生“把”字句習得情況考察與探析, 《雲南師範大學學報》3: 41-46 頁
- 高曉華 2003. 日本學生學習漢語“把”字句偏誤分析, 《北星論集(經)》2: 95-102 頁
- 胡苗苗 2021. 針對日本留學生進行“把”字句教學的探討, 《中學課程輔導(教師教育)》11: 86 頁
- 胡韜奮 2015. 麵向二語教學的“把”字句分類研究, 《曲靖師範學院學報》2: 84-90 頁
- 黃月圓, 楊素英 2004. 漢語作為第二語言的“把”字句習得研究, 《世界漢語教學》1: 49-59 頁。
- 教育部中外語言交流合作中 2021. 《國際中文教育中文水平等級標準》, 北京: 北京語言大學出版社
- 金立鑫 1997. “把”字句的句法、語義、語境特征, 《中國語文》6: 415-423 頁
- 李寧・王小珊 2001. “把”字句的語用功能調查, 《漢語學習》1:55-62 頁 李泉 2012. 《對外漢語教材通論》, 北京: 商務印書館
- 李英・鄧小寧 2005. “把”字句語法項目的選取與排序研究, 《語言教學與研究》3: 50-58 頁
- 劉頌浩 2017. 致使“把”字句在對外漢語教學中的地位問題, 《國際漢語教學研究》2:58-70 頁
- 劉頌浩 2018. “把”字句習得研究中的兩個問題, 《華文教學與研究》2:13-19 頁
- 劉月華等 2019. 《實用現代漢語語法(第三版)》, 北京: 商務印書館
- 呂必鬆 2010. “把”字短語, “把”字句和“把”字句教學, 《漢語學習》5: 76-82 頁
- 呂文華 1994. “把”字句的語義類型, 《漢語學習》4: 26-28 頁
- 沈家煊 2002. 如何處置“處置式”——試論“把”字句的主觀性, 《中國語文》5: 387- 399 頁
- 藤井洋一 2021. 日本留學生習得“把”字句偏誤及回避現象分析, 碩士論文 山西大學
- 王玲玲 2021. 基於語料庫的中高級日本留學生“把”字句偏誤研究, 碩士論文 渤海大學
- 王占華 2011. “把”字句的項與成句和使用動因——一個基於二外教學的“把”字句解析模式, 《世界漢語教學》3: 400-411 頁
- 溫曉虹 2012. 《漢語作為第二語言的習得與教學》, 北京: 北京大學出版社
- 許曉華・崔淑燕 2012. 與中介語石化現象相關的幾個問題——以日本留學生“把”字句習得為例, 《語文學刊》9: 112-114 頁
- 張寶林 2010. 回避與泛化——基於“HSK 動態作文語料庫”的“把”字句習得考察, 《世界漢語教學》2: 263-278 頁
- 張寶林 2018. 關於漢語句式習得研究方法論的再探討, 《華文教學與研究》2: 20-29 頁
- 張伯江 2000. 論“把”字句的句式語義, 《語言研究》1: 28-40 頁
- 周小兵 2007. 《外國人學漢語語法偏誤研究》, 北京: 北京語言大學出版社
- 趙小波 2013. 韓日學生“把”字句偏誤類型對比研究, 碩士論文 浙江大學

例文の出典

- (CCL): 北京大学中国語言学研究センターCCL コーパス」 http://ccl.pku.edu.cn:8080ccl_corpus/
- [(BCC): 北京語言大学 BCC コーパス」 <http://bcc.blcu.edu.cn/>